

工コミュニティダム研修会

昨年九月二十一日(水)湯田町湯夢プラザで東海大学名誉教授の相澤史郎先生をお迎えして演題を「黄金の道・秀衡街道を中心に」としてお話をいただきました。(以下に講話内容を記載します)

私は北上の駅前で昭和六年に生まれ、黒沢尻北高校の出身です。

秀衡街道の本をつくる話があって、地元の皆さんから様々お話を聞いて、湯川で二ヶ月ぐらのお世話になりました。現在は北上市の民俗村の村長をしています。



◇姥杉が切られそつになるのとケヤキ伐採事件がほぼ同時期

多聞院伊澤家の文書(もんじよ)では一七三九年の一、二年ぐらい前に、鬼柳通りの長兵衛という男が多聞院にやってきて姥杉を切らせると言ってきた。花巻代官所は盛岡藩で判子をもらうはずだから許可をくれと言った。当時の山は全部藩のもので、寺や山伏などが二重に管理をしていた。それであわてた多聞院

では、村の代表たちを集めて相談したら「そんなことはとんでもない、絶対にだめだ」となった。それで多聞院では鬼柳の長兵衛にあきらめてくれと言って脅しをかけた。花巻代官所や盛岡藩にも切らないでくれと訴えたそうです。話しはそれっきりで、危なく切られるところで終わった。

また、大荒沢のケヤキ伐採事件についても一七三九年のことです。孫作がケヤキを切って事件になってつかまって、代官所のトップは腹を切り、残りの同心三人は首を切られた。仙台藩に売ろうとして仲立ちをした、黒沢尻の善三郎も花巻代官所で首を切られたようです。そのような経緯から孫作地蔵、首なし地蔵と呼ばれている。

南部藩はそのころから、財政が逼迫します。これまでは、金とか鉄など金属類で潤っていて、かなり豊かな藩でした。それが底をつきはじめて、今度は何を売ろうかという木に目をつけはじめた。

調べてみたら江戸には、大きな大火はないですが大きな神社、仏閣の改修が盛んになっている。神社に使う古木や銘木は、非常に高かった様で一本で一山と同じぐらいの値段がした。

あまりにもこの二つの事件が時を同じにしている。特に長兵衛という人はかなり自信を持って切ると言っている。ど

うも花巻代官所と通じているような気がする。孫作の事件も花巻代官所から許可の判子をもらっています。これは藩をあげて立派な木、非常に高い木を切って江戸に持って行く。藩財政をそういうもので潤わせようとして、商人と代官所あるいはその上が、ある意味通じていたのではない。代官所の下級の侍が犠牲になって、孫作や商人たちもうまくのせられたという感じがあります。



◇宮城県金成町(金売り吉次の話)

金売り吉次の伝説が残っているのが宮城県の最北端の金成です。ここに炭焼き藤太という男がいました。炭を焼いているという事は、金とか金属を溶かす石炭のようなものです。ですから大昔は、非常に金と関係がある。炭焼き場にごろごろしていた金を拾って京都に売って金持ちになる。そして子どもが三人生まれ長男が吉次です。そして吉次が金売りの商人になって金成と京都を往復して、ますます金持ちになったという話がありますが、金成に残っている。金の採れるところにはかならず金売りの吉次が現れる。そしてその背後には炭焼きの藤太の伝説がある。

金売りの吉次は義経を連れて平泉にやってきたのは事実のようです。義経を秀衡にわたして金売りの吉次の話は終わりますが、ところが吉次は一人に考えられない。吉次はいろんなところに現れて、

いろんなところに屋敷をもって、そして盗賊に殺されてお金を奪われて、ずいぶんひどい目に遭いますけれども、次から次へと吉次が現れる。これは一人ではない、吉次集団がある。

平泉周辺には荘園がある。神社とか貴族とか位の高い侍が、平安中くらいから農業をやらせて収穫する荘園を作っていた。どうも京都辺りとは違って、平泉周辺の荘園は宗教関係の人が、神様を信じれば非常に幸せになると農作物も採れると、というようなお札をつくって宗教をひろめながら農地を広げていった。金成もそのような荘園の一つだと見えています。

◇峠の意味を言葉から探る

同じような名前の峠がこの辺りもありますが、この金成の西の方でも同じ名前の峠がある。続日本紀に五つの峠がしめたとでてきます。そうかと思つて湯田の地名をみると、似たような峠が西に向かつてある。たとえば檜の峠は、檜(ひのき)が沢山あるからだが高橋文治さんに教わりました。ところが戦後、朝鮮半島の人は、そこにお日様の日の峠と書いた標柱を建てたと聞いて、あれと思ひました。昔、東朝鮮半島の人は峠に名前を付けて歩いてた。名前に日という言葉が入ります。白井峠など、井とか日が多い。何か意味があるのではないかと思ひます。これは必ずしもアイヌではないなと思ひました。これは今後の課題です。

(おぼあちゃんからリンドウの贈呈)

リンドウの花をいただいた思い出しましたが、紫色の花が咲くところは、金がいっぱい採れるそうです。(完)

エコミュージアム・プレジャー

昨年(2017年)の十月九日(日)に「黄金の道・秀衡街道を歩く」秋を味わう湯川きのこ祭り」と題して、秀衡街道歩きながら、エコミュージアムの活動を知っていたべくツアーを実施しました。鷲之巢から檜の峠を通り湯川まで歩きました。(所要時間約三時間)湯川到着は十二時を過ぎ、お腹もすいたところで秋の美味しいきのこに舌鼓を打って終了しました。

○黄金の道・秀衡街道

沢内風土記を書いた高橋子績という人は、宮古のお役人というわけか西の端の沢内村に流罪になってきた。流罪の身でありながらこの地域をくまなく歩いて、文に書き絵に描いて残した。沢内風土記の中に、新しく南部藩と秋田藩で協定してできた白木峠に登った時に、はるか下の方を眺めると秋田に通じる平坦な道がある。これを秀衡街道と呼ぶという一文が残されてある。平坦だけれど遠回りの道なので、白木峠の道ができたとき書いている。それだけの文章(もんじょう)しか残っていない。

○鷲之巢金山(風倉山)

本当の坑道は山の上の方から下りてきたのだと思いますが、左側に見える穴は空気(換気)穴で、当時のままになっています。



鷲之巢金山(風倉山)

右側は昭和三十年代ごろまで露天掘りをしたので、藤原時代の当時と違っています。山の名前は風倉山といいますが、頃から掘り始めたのか、記録が何も残っていないが、西和賀でもっとも古い鉱山だといわれている。こういう山は、歴史遺産になるわけで、なんとか保存をしていくのが私たちの願いです。



檜の峠の大標柱

○湯川の檜の峠の大標柱

土畑鉱山選鉱場の土台である青森ヒバを、鉱山側に交渉してそれをいただき、みんなでノミで彫り上げたものである。湯川と甲子との交流は昔から秀衡街道を往来して交流がはじまったと思われる。

湯川の人々は林道ができてから、標柱を3本建てた(甲子口・檜の峠・湯坂口)その延長があつた檜の峠の大標柱となる。石碑については土畑鉱山系であつた青森の「あべしろ」という鉱山(銅の鉱山)から機械が運ばれてきて、設置・作動運転として一緒にきた技師が朝鮮人であつた。その朝鮮人がふるさとを想つたのかどうか「日の峠神」と立てたのは始まり。昭和の一桁時代に建てたもので、コンクリートづくりだったので現在も残っている。その彫られた文字が日輪の日である「日の峠」となっており、周辺の人々には檜の峠は日の峠と思われる。

◆地元学開催のご案内

「神社のしめ縄づくりの伝承」
 日時 平成18年1月29日(日)
 時間 9時30分～15時まで
 場所 大野地区公民館(ふれあい館)
 参加料 大野地区民は無料(部落負担)
 地区外は三〇〇円(昼食代)

大野地区では五箇所にある神社に奉納する「しめ縄づくり」を世代間交流、伝承活動をめざして、公民館に集い全地区民でここ数年取り組みを行っています。貴重な伝承文化活動ですので、是非、興味のある方は参加し、しめ縄づくりに挑戦してみたいかがでしょうか。また、老人クラブの方々から協力をいただき、昔語りも予定しています。



昨年1月に完成した氏神様のしめ縄!! (大野地区公民館にて)

◆地元学の資源カードの冊子

今まで地元学を実施した地区ごとに、「地元学資源カード」をまとめた冊子を地元公民館に置いて、地域活動等に活用していただきたいと思います。

なお、ご覧になりたい方はどなたでも、これまでの地元学を実施した地域のデータをとりまとめて、4月以降、役場企画課内に保管することを予定して作業を進めておりますので、是非、ご利用ください。

◆西和賀の自然と歴史の小冊子の発行

西和賀広域エコミュージアムでは、西和賀の自然と文化のシリーズとして、毎年、小冊子を発行していく予定にしております。昨年は、全国カタクリサミットの開催にあたり、第一弾としてカタクリの小冊子を発行いたしました。今年も、秀衡街道の探査会の活動を中心にした小冊子を発行する予定です。図書館や公民館に配布いたしますのでご覧ください。



著者 興と著者との関わりが深い内容です。瀬川さん、強さ、深さ、味わいがあります。

◆広域エコミュージアムのホームページ

西和賀町の資源情報の内容をさらに充実して、更新しましたのでご覧ください。

トップページ

ホームページのアドレス
<http://www.nishiwaga-eco.com/>

西和賀広域エコミュージアムの活動のご理解と支援を広げたいと思っています
連絡先 西和賀町川尻40・40・71
湯田庁舎 TEL 八二・三三八四 企画課